GR
白雲郷

とりみ

玄奘三蔵塔

52

埼玉　名栗

昭和57年4月17日

宗教法人
白雲山 鳥居観音

塔前に立つ法師像
（平沼弥太郎作）

表紙解説

玄奘三蔵塔縁起

鳥居観音の山腹に建つ玄奘三蔵塔、堂内に玄奘法師の霊骨が祀られている。

法師は今を去る一千三百八十年、中国河南の古都洛陽の東方に生れ、幼くして佛信篤く二十才の頃高僧に師事し、更に釈迦の真の教えを求めて遠くゴビ大砂漠、天山険路を踏破し、あらゆる困苦を克服して、遂に釈迦の生地印度にはいられた。（この間の長い旅での苦難の物語が「西遊記」として本誌に連載されている）

勉学すること十七年の後、馬二十頭分の梵典を中国に持ち帰り、一千三百余巻のお経の翻訳を完成し、特に「大般若波羅密多経」六百巻の訳経は、中国、朝鮮、日本の佛教文化の礎となった。

こうした法師の業績は、万古不易、釈迦に次で崇敬される偉大な恩人であるが、法師の霊骨が日本に祀られていることは稀である。

偶々戦時中、中国南京で発掘された法師の霊骨供養に参列した日本佛教界代表の水野梅暁師が、霊骨の分贈を得て帰国されていたがその後水野老師が名栗村平沼弥太郎氏宅に疎開された際、平沼氏の観音霊場建設の悲願に深く感銘されるところがあって、ここに霊骨の一部がお祀りされるに至ったものである。

建　立　昭和三十五年十二月八日落慶
鉄筋コンクリート銅葺、地下一階、地上三階建、総高三十三米

発　願　者　鳥居観音開祖　平沼弥太郎

発起人総代　石橋湛山（元総理大臣）

理　事　高階瓏仙（元曹洞宗管長）

その他　吉田茂、岸信介、他政財界三百余人及篤信者。

如意輪観音

切り取ってご使用ください。

写真解説

鳥居観音のご本堂に祀つられている七観音の内の一尊像で「如意輪観音」さまと申されます。

意のままに法輪が転じて、人を救済されるところから、このおん名があります。

そのお姿は貴く豊麗で、ゆび先を頬にあてられての、ご思惟のご尊容は、そのまま、この観音さまの妙えなるお慈悲が、うかがえることでございます。

鳥居観音開祖平沼弥太郎先生作
ご本尊の「聖観音」さまに次で
昭和三十年祭祀
先祖の残された裏山の大桧での
一本彫り。総高二、八米

とりゐ　目　次　第52号

表　紙　①玄奘三蔵塔
表紙裏　②表紙解説
口　絵　③本堂に祭祀の「如意輪観音」
口絵裏　④口絵解説

拓魂慰霊……鳥居観音　尾尻　天外……二
道光禅師と鳥居観音……平沼先生夫人　平沼　とみ……四
道光禅師ご法話（其三十四）……五
禅のはなし（其　二）……大本山総持寺前副監院　佐藤　俊明……八
西　遊　記（其四十五）……十二
一万体観音満願報恩法要予告……十八
一万体観音奉安者報告……十九
写経奉納者報告……二十
第三文庫建立中間報告……二十一
鳥居観音便り……二十二
裏表紙裏　寺域案内図
裏表紙　これからの行事

本堂に於ける法要

大和拓友会渡満四十周年記念

慰霊法要

鳥居観音

尾尻天外

夜来の雨もあがって、朝から雲一つない快晴。まこと、お天とうさまのお恵みよと、両の手あわせて拝んだことでした。

昭和十六年、国策に副って満蒙開拓に参加した可憐な少年隊。不幸終戦を境として異境に果てた同友の霊を祀って昭和五十一年、鳥居観音の霊地に、祖国に帰った、かつての少年達によって、慰霊碑が建てられた。

爾来毎年、会員相寄っての慰霊の行事が行われて今日に至っている。

この日十一月八日、会員数十名、県内外広島からの参集もあって、鳥居観音本堂に於て心ろからの慰霊法要が行われた。

霊前に献げられる元隊長、久保義雄氏（八十一才）の、心に泌みる哀悼の辞、同友代表の涙の追憶等、四十年を回顧する会員諸氏の無量の感懐が、ひしひしと感じられることだった。

最後に導師を勤めた私しから「北馬朔風に嘶く」……

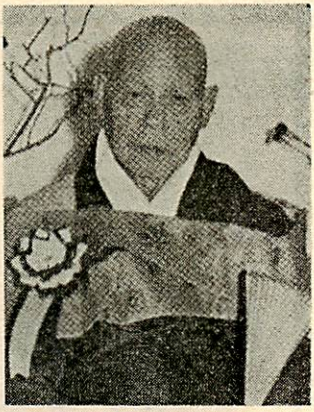
拓魂千載青史を照す

慰　霊　碑

亡き友を偲び、霊にわが心をたむける、みなさんの美わしい衷情が、また嘗て培かわれた拓魂の精華が、今日の日本文化を形作ったものであるとし、当山開祖平沼先生も、「拓魂千載青史を照す」と慰霊碑に刻して、賺けられておられる……とご挨拶させていただいた。

本堂の法要を終えて、山腹の慰霊碑に参拝、植樹、献花の後、庫裡に於て総会、懇親会と続き、午後四時半、全員再会を約しての下山であった。

合　掌



道光禅師　高階瓏仙猊下遺影

道光禅師さまと
鳥居観音

禅師さまは、日本仏教界の最高峰であり、曹洞宗の管長でもあられましたが、私共夫婦が、日本仏教会に参加しておりました関係で、常に身近なご教導に預り、特に世界仏教大会には、禅師さまの団長のもとに、主人が副団長としてビルマにお伴ができ、又タイ国の大会、日本大会など、いろいろお世話させていただきました。

禅師さまは「千手観音さまが子歳生れのご自分の守り本尊だ」とおっしゃって、主人が千手観音像を謹刻中は、度々アトリエにお出ましがあって、お泊りもいただいたことでしたが、鳥居観音の仏像や、堂塔の開眼落慶など、常に禅師さまにご導師が願はれ、三蔵塔には「蓮華峰」の扁額を頂戴し、参道の支那門には「玉華門」とご染筆を忝ういたしましたが、その一ヶ月後、昭和四十三年一月、九十三才でご遷化でございました。

今尚鳥居観音に参拝する度に、この絶筆となった文字を拝しまして、心の痛むことでございます。

平沼　とみ　合掌

道光禅師ご法話（故高階瓏仙貌下）

生活即仏法（其の三四）

そもそも仏教が、みなさまの日常生活に、どれだけ関係づけられるものであるかと申しますと、かんたんに考える人は、家庭に仏壇をそなえて、祖先のまつりをいとなむようなところに関係がつくられているていどに思っている方もありましょう。それも家庭的日常生活の上に関係づけられている大切な仏教観念ではあります。

けれども、私がお話いたしたいと思うことは、おのおの自分々々の立場にあって、実際生活を支配する仏教意識、信念を、もとめていただきたいのであります。なんとなれば、仏教の本質から申しますと、すべての人の日常生活は、本来仏法でないものはないのであります。それをいつの時からか、ふみちがえるようになったので、世法と仏法とを別に考えるようになりました。それが仏教から申しますと、逆ということであります。ゆえに仏典に、

「世法の中に仏法なく、仏法の中に世法なし」

ということばがあります。

これは世俗の方から見ると、世間と仏法とは別々に思われて「あれはお寺の仕事、僧侶の仕事」、口の悪い人は「坊主の仕事、われわれに用事はない」などというように、仏教をひきはなして考えますけれども、仏教の生命からみますと、世俗と仏法とひきわけるものでなく、在家の人の実生活もみな仏法として見通すのであります。ゆえにまた、

「仏事門中不捨一法」

とも申しております。仏事とは仏のことと書いてあります。すなわち仏法の作業のなかには、不捨一法といって、一つも捨てるものはないということでありますから、これは社会の動きをみな仏法の仕事として、とりあつかうのであります。

いわゆる在家の人の生活であるところの、治生産業を、みな仏法の活動とするのであります。ゆえに道元禅師は

威儀即仏法
作法是宗旨

と声明していられます。威儀とはおたがいの立居振舞のことであります。それは行住坐臥という、行く事、住まう事、坐する事、臥する事、それを人間の四つの威儀と申しておりますから、ここから自然、威儀が正しいなどという字があります。ゆえに今申しましたとおり、ねるも、おきるも、立居振舞いの威儀をはなれて別に仏法はないぞ、ということ。また作法といえば、男は男、女は女、父は父、母は母、子は子、商売人は商売人、労働者は労働者で、それぞれ人の身分に応ずる働き方があり、それを作法といいます。その各自の作法のそのままに、宗旨の生命が存在しているということであります。

ですから、私たちの働きのそのままに、仏法の生命が存在しているそのことを、威儀即仏法、作法是宗旨といったものであります。この意味が自得せられたとき、家庭はおろか、全生活がみな宗教生活となっていくのであります。されば、ある一修業僧がむかし、有名な青原禅師（中国吉州青原山にいた人）のところにいって、

「いかなるかこれ仏法の大意」

と尋ねたことがあります。青原の返答は、

「蘆陵の米作麽の価ぞ」

と問い返えされました。それはこの僧が仏法というものは、現実をはなれて、別になにか、もったいらしいもののあるかのようにさがしてきましたから、

「道は、近きにあり」

ということを教えたのであります。青原和尚のまことに親切なる返答であって、

「……おまえは蘆陵の者というが、蘆陵は米の産地である。今米価は何ほどぐらいしているか……」

とまことに平凡なところに、仏法の大意を見せられようとしたものであります。

また、あるとき、同じ修行にはじめて出たばかりの僧が趙州禅師(中国曹州の人)のところにいって、

「私は、はじめて仏法修行の道に、はいってまいりました。道を求めるには、どうすればよろしいか、お示しください」

と訊ねましたので、趙州は、

「そうか、お前は、今朝お粥を食べたか」(禅宗の僧堂ではお粥ときまっている)

と問い返すと、

「食べました」

と答えました。すると、

「お粥がすんだら、茶椀を洗っておけ」

と教えられました。

これらをみましても、仏法は目さき、手さきにあることがわかります。これらはみな〝公案〟といって、禅宗の一つ一つの問題としてありますが、これらは実に威儀即仏法のお示しであります。

また薬山禅師(中国山西省の人)というかたは、李翺という居士が仏法を問うたのに答えて

「雲は青天に在り、水は瓶に在り」

と示されました。

禅師画

天上の月を貪りみて
手中の珠を失却すべからず

禅のはなし

「無念無想とは」

大本山総持寺
前副監院　佐藤　俊明

クルマの運転をする人ならどなたにも思いあたることだろうが、練習しはじめのころは、シフト・レバーの操作に気をくばるとハンドルがおろそかになる。ハンドルに心を奪われると足の動きがギクシャクして思うようにならない。クラッチ操作をスムーズにしようとすると方向指示を忘れてしまう。両手両足それぞれの操作にまんべんなく心をゆきわたらせることはなかなかむずかしい。それが練習の成果によって何等意を用いずして自由自在に動くようになる。考えてみれば不思議なことである。そこでここに千手観音さまにおでましをねがうとしよう。

千手観音はくわしくは千手千眼観世音菩薩といって、手が千本あり、その掌にはひとつひとつ眼がついている。眼のついた千本の手をもって一切の衆生を救済なさる観音さまである。が、普通一般の木像では手が四十本しかない。それは一本の手で三界二十五有の世界を受持つから四十本で千本のはたらきをする計算になる。

奈良の興福寺には実際に手が千本あるりっぱな観

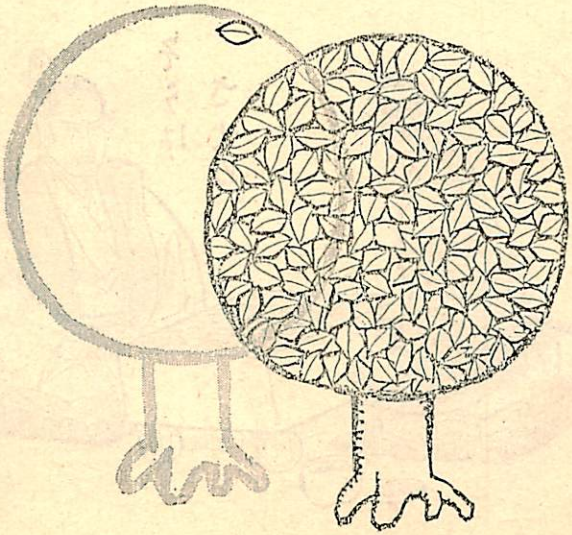
音さまがあって、徳川時代、その観音さまを江戸に持っていってご開帳をしたら、たいへんなおまいりがあったそうだ。参詣人の中に皮肉な人がおって、「なるほどこれはたくさん手がある。千本あるにちがいない。それにしてもお足が二本じゃ足らんじゃないか」

と言ったら、説明役の坊さんが、

「そうそう、そのおあしが足らんからこうして江戸までもらいに来たんじゃ」

と言ったという笑い話がある。

それはさておいて、沢庵禅師が柳生但馬守に与えた『不動智神妙録』に、手が千本あっても一つの手の動きに心がとらわれてしまえば、残り九九九本の手はどれも役に立たなくなってしまう。一ヵ所に心をとどめないからこそ千本の手がみな役に立つのだ。観音とて、一つの体にどうして千本もの手を持っているのかといえば、不動智を開くことができれば、たとえ千本の手があったにしても、自由に使いこなせるものだということを人々に示すための姿で



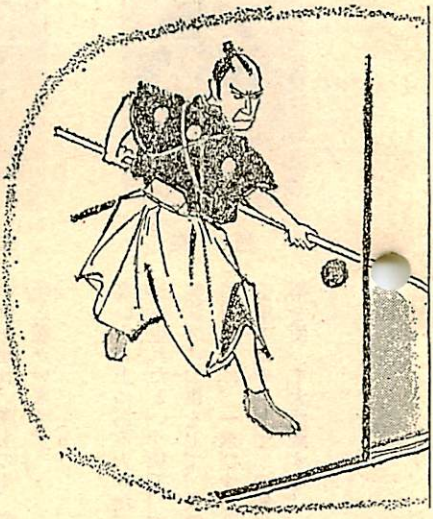
ある。

たとえば一本の木を見ているとしよう。その中の赤い葉一枚に心をとめれば、残りの葉は目に入らないものだ。葉一枚一枚に目をかけずに、木の全体を何ということもなく見るなら、たくさんの葉が残らず目に映る。一枚の葉に心をとらえられれば残りの葉は見えない。一枚の葉に心をとらえられることがなければ百千の葉はみな見えるものだ。このことを悟った人はすなわち千手千眼の観音である……と述べ、さらに

「向うへも左へも右へも、四方八方へ心は動き度きように動きながら卒度(そっと)も止まらぬ心を不動智と申し候」

と示している。

禅というと無念無想を連想し、それは木石のように無神経になることだと誤解している向も少なくないようだが、無心とか無念無想とかは実はそうでは



なく、四方八方に気をくばり、細心の注意を払いながら、しかもどこにも心をとどめないことである。天地いっぱいの充実感をもって、しかも何物にもとらわれず、こだわらず、時処位に応じ自由自在にふるまう。これが無心であり、無念無想であり、不動智であり、道元禅師のいう非思量である。そしてそれは剣道の極意であり、芸道の奥儀でもある。

宮本武蔵が、徳川義直の槍術指南番田辺八右衛門長常の家を訪れたとき、長常ははじめ手合わせをとも考えたが、会ってみると、何もいまさら、という気になって、息子の碁の相手になってもらい、自分は自慢のふな料理でも仕度しようと座をはずした。武蔵は長常の息子を相手に碁をはじめたが、そのうち、盤面をにらんで、ジッと手数を読んでいたが、突如ピシッと石を打ちおろし、

「そうはさせぬ！」

と、叱りつけるようなひとり言をいった。息子がびっくりして武蔵を見ると、すでにそのときは平静な顔に戻っていたという。

では何故そんなことを言ったのかというと、実はそのとき隣の部屋から、長常が稽古槍で武蔵を突こうとスキをうかがっていたのだという。

碁盤に注意を集中していても、これにとらわれず、四方八方に気を配っている武蔵はさすがに達人である。

西遊記（其の四五）

「西遊記」は玄奘三蔵法師が、天竺（インド）から中国にお経文を持ち帰るまでの、十七年間の、苦難の物語りです。
法師のご霊骨が鳥居観音の三蔵塔に祀られていることに因んで、連載しております。
本誌表紙裏の「三蔵塔縁起」をご参照下さい。

この物語りに出てくる主な人々

玄奘三蔵法師

中国の偉いお坊さんで玄奘三蔵法師という。天竺にお経をとりに行く長い旅に、悟空、八戒、沙悟浄の三人の供を連れ、魔ものや、妖怪と戦かいます。

悟　空

高い山の上にある大きな石から生れたという猿で、玄奘法師のお供をして、災難に遭う度に、一飛び十万八千里の術や、七十二の変化術を使って大活躍する。

八　戒

形は人間で、顔は猪の妖魔天上界から下界に落とされて、こんな姿になったという。玄奘法師から八戒の名をもらい、悟空達と一緒に活躍します。

沙悟浄

流沙川に住んで、人を喰っていた妖怪で、八戒と戦ったこともあるが、後で玄奘法師の弟子となり、悟空や八戒などと一緒に師匠さんを助けます。

大きなながもち

それからまた、三蔵法師の旅はつづきました。はやく天竺へいこうといそぎましたが、道は遠くてけわしくなるばかり。みんなは、はげましあっていきました。

あるいないかを歩いていたときです。

「みなさん、どちらへおいでですか。」と、声をかけた者があります。

見ると、子どもの手をひいたおばあさんです。このおばあさんはやさしい顔をしているので、みんなはほっとしました。

「あちらへまいる者です。」と、法師は、西の空をさしてこたえました。

「それはいけません。あなたがたは出家のようにお見うけしますが、西のほうには、おそろしいものがいますよ。」

「どんなことだい。おそろしいものって、なんだい。おししょうさまはえらい方だし、われわれはつよいのだ。世の中にこわいものなんてないよ。」と、八戒が、とがった口をつきだしました。

「だまっているんだ。口だしをするな。」

こう八戒をしかりつけたのは、白馬のたずなをひいていた悟空です。

「おばあさん、おそろしいことというのは、なんだろう。話してくれないか。」

「はいはい。お話しますとも。」

おばあさんは、まがったこしをのばしていいました。

「西へいくと、滅法国という国へいきます。おそろしいのは、その滅法国の王さまです。二年ほどまえのことでした。坊さんを一万人ころせば幸福になるといいだして、坊さんを見れば、すぐにころしてしまいます。うわさによると、これまでに九千九百九十六人ころしたといいますから、あなたがた四人をころせば、ちょうど一万人になるわけです。あなたがたがいけば、王さまはよろこぶでしょうが、あなたがたはうれしくはありますまい。おやめなさい、

おやめなさい。もとの道を、ひっかえしてはいかがです。」
「ばかをいえ。ころされるほどばかじゃない。」
八戒は、おこりだしました。
法師は、ぶるぶるふるえました。
「悟空、滅法国をとおるのはあぶない。どうしたものであろうな。」
「おししょうさま、わたしにかんがえがあります。ごしんぱいはいりません。」
悟空は、じっとおばあさんのようすを見ていました。すると、おばあさんは観音さまで、子どもは、でしのひとりだということがわかったのが、あわてて土にひざをつきました。
「これはこれは、観音さま、よくお知らせくださいました。ありがとうございます。」
すると、おばあさんは、にっこりわらって、でしといっしょに、五色の雲にのって、空へのぼっていきました。
「おししょうさま、ごらんのとおりです。観音さま

のお知らせがありましたから、もうだいじょうぶです。観音さまは、わたしたちをおまもりくださいます。げんきをだしてまいりましょう。」
「だが、悟空。もしものことがあっては、天竺へもいけなくなるのだよ。」
「悟空がおります。八戒と悟浄のふたりも、いくらかやくにたちましょう。」
きいて八戒が、またおこりました。
「いくらかやくにたつとはなんだ。ばかにするな。」
「ははは。きこえたら、ごめん、ごめん。」
悟空は、法師や八戒、悟浄をほら穴にかくしておいて、滅法国のようすをさぐりにでかけました。
夕方でした。町の家いえには、とうろうの火がまたたいていました。
ぶらぶら歩いていくと、一けんの宿屋が目につきました。のきのとうろうに「王小二旅館」と書いてあります。なにをかんがえたのか、悟空は、そっと旅館にしのびこんでねている客の着物とずきんを四人ぶんだけつかむと、いそいで、法師のところへもどりました。
「おししょうさま、しんせつな人から、着物とずきんをかりてきました。これをきて、商人にすがたをかえれば、あやしむ者はないでしょう。さあさあ、どうぞ。」
法師をはじめ、八戒と悟浄の着物をきかえさせ、じぶんも商人にかわりました。
「これで、すがたはかわったが、ことばもかえなければいけない。わたしたちは、おししょうさまを大だんなとよびましょう。八戒は猪だんなで、悟浄は沙だんな。わたしは孫だんなということにする。わかったな、八戒、悟浄。まちがえると、おたがいにいのちがなくなるぞ。」
「よびにくい名だな。ほかにいい名はないかい、悟空のきょうだい。」
「おっと、もう悟空のきょうだいじゃない。孫だんなとよぶのだ、気をつけろよ。」
「では、孫だんな。」
「なんだい、猪だんな。」

すっかり商人になりすまして、四人は王小二旅館のとなりの宿屋へ、はいっていきました。
「わたしたちは馬商人だが、歩きつかれてへとへとだ。しずかなよいへやがあったらとめてくれ。」
悟空は、すましていいました。
「はいはい。一等のへやがあいています。どうぞこちらえ。」と、女中が二階へあんないしました。
「ごちそうをたのむぜ。」
へやへはいると、八戒は、もうたべもののさいそくです。
「はいはい、かしこまりました。鳥とぶたのお料理は、いかがでしょう。」
「いや、それはいかんな。ほかのものがいいな。」と、悟空が、あわてていいました。
坊さんは、肉をたべてはいけないのです。でもそういえば、女中にうたがわれるかもしれません。そこで、どこまでも商人らしく、
「女中さん、きょうは、母の命日でね、ざんねんだが肉はたべられないのだよ。油あげとか、だいこんとか、そういう精進料理にしてもらいたいね。」といいました。
「そうですか。では肉はやめにして、お酒をすこし持ってきましょう。」
女中は、そういって、まもなく料理をはこんできました。
のんで、たべて、さて、ねるときになって、こまったことができました。
ねるときは、着物をねまきにきかえなければなりません。着物の下にきているころもを女中に見られては、ぐあいがわるいことになります。ずきんをとれば、法師のつるつるあたまがあらわれます。それでは、坊さんだということが、女中にわかってしまいます。
「悟空、どうしたものであろうな。よいちえはないか。」と、法師は、うでぐみをしたきりです。
悟空は、しばらくかんがえていましたが、手をうって、女中をよびました。
「女中さん、わたしたちは、くらいところでないと

ねむれないくせがある。どこか、そういうへやはないかね。せまくてもいいのだよ。四人がいっしょにいられれば、どんなところでも、それでけっこうなのだがね。」
「へえ、くらいところですね。くらいところ……くらいところで、しずかなところ……と。」
女中は、こくんとうなずきました。
「へやではありませんが、ながもちの中はいかがでしょう。とくべつ大きなながもちで、あなたがた四人がらくにはいれます。あの中ならば、風もとおらず、光もさしません。くらくてしずかで、きっとお気にいりましょう。」
「ながもちというと、着物などをいれておく、長い箱だな。いいだろう。」
悟空は、法師にむかっていいました。
「まず、大だんなから、どうぞ。猪だんなも、沙だんなも、おさきにおはいりください。」
こういって、ほかの三人をいれておいて、じぶんは、あとからはいりました。

女中が、ふたをのせました。なるほどまっくらで、しずかです。でも、きゅうくつで、身うごきもできません。これには悟空も、すこし、まいってしまいました。

「西遊記」は「三国志」「水滸伝」と共に中国の三大奇書といわれる中で、一番人気をよんできた読みものです。
悟空、八戒、悟浄の三人の働きによって、凡ゆる苦難を乗り越えてゆく物語りの中に、人間の生涯におきてくる、さまざまの艱難を知、情、意、の三つを働かして、切り開いてゆかねばならない……と教えられることです。

奉安された一万体観音の一部

一万体観音満願報恩大法要予告

昭和四十六年、山頂に救世大観音が建立された機をご縁に、江湖ご信者の先祖さまを、観音さまのみ法のうちに奉祀することが発願され、爾来全国篤信の方々からの奉安が続けられ、近く一万体満願が迎えられようとしております。

みなさまの貴いご報恩の至情、誠にありがたく、厚く御礼申し上げる次第でございます。

就ては今秋、当山恒例法要に併せ、満願法要を修行し、大勢さまの、ご参拝をいただきたいと存じております。

尚、満願後も篤信者のご要望にお応えして、引き続き奉安のお受付をいたしますので、今後一層のご縁結びがいただけますよう、又ご関係の向きなど、お勧進願えれば、誠にありがたいことでございます。

奉祀料（永代供養料）

一体　二〇、〇〇〇円也

※奉祀の方には、仏壇用の観音像を差し上げます。

事務局にお申越し下さい

電話でも結構です。

電話　〇四二九七―九―〇四一七番

奉祀料銀行振込でも結構です。

埼玉銀行名栗特別出張所

鳥居観音普通口座五〇〇七九番

一万体観音 奉安者芳名

自 五六、一〇
至 五七、二
敬称略

数	住所	芳名
五	府中市	田中 基子
三	〃	鈴木 かず
三	渋谷区	吉田 美子
三	〃	高田 とよ
一	川口市	栗山 登茂
二	東村山市	須藤 良造
二	〃	坂井 よし
一	日高町	田中 明
一	東大和市	松野 翠
一	大阪府	佐藤 弘
一	新宿区	生方 光雄
一	〃	石沢 初江
五	横浜市	島崎良次郎
五	平塚市	後藤 惣平
一	東村山市	村山宗太郎
一	新宿区	美濃部強次
二	武蔵野市	木崎 幹
一	新宿区	嶋田徳三郎
一	横浜市	佐藤喜美子
二	渋谷区	有島 順江
一	新宿区	村松 協子
二	市川市	萩原 なみ
一	武蔵野市	金子 弘
五	福岡市	横井 文平
五	北九州市	佐藤 重雄
一	中野区	鈴木 和子
一	千葉県	太智 さの
三	浦和市	浜田 庄蔵
二	〃	藤巻 まつ
二	館林市	三田 清月
三	川越市	細井 富江
二	〃	杉山 さと
一	所沢市	越阪部 勝
五	市川市	藤本 勘市
二	〃	佐藤 喜平
一	川崎市	住田 くに
三	所沢市	越阪部源一
二	八王子市	鈴木 英子
一	昭島市	中井 節子
二	熊谷市	関根 和夫
二	国分寺市	広田 うめ
二	〃	河野 政三
二	秋川市	近藤福之助
二	所沢市	山崎 隆夫
三	富山市	井上 邦子
二	秋田市	増田 清蔵
二	江東区	泉 和子
三	八王子市	根本準之助
二	田無市	小沢 みち
二	熊谷市	藤田 孝一
一	所沢市	新井 キミ
一	新宿区	相内 文一
一	〃	松崎 秀吉
一	〃	小林 ナツ
一	〃	宮村 剛

本表計　奉安数　一一五体　施主数　五五人
五七・二現在総計
奉安数　九、八四七体
施主数　三、九二二名

写経奉納者芳名

自 五六、一〇
至 五七、二 敬称略

数	住所	芳名
三	武蔵野市	内田さつき
一	練馬区	吉田 節子
一	杉並区	河村 やえ
一	新宿区	鈴木 一枝
一	目黒区	上田 栄一
一	杉並区	野崎 直澄
二	新宿区	斉藤 清治
一	国分寺市	依田つね子
五〇〇	渋谷区	有島 杉光
一〇〇	荒川区	宮後堅太郎
五〇		篤名者
一	中央区	西沢はる子
一	文京区	小野清一郎
一	大田区	渡辺 ひで
一	目黒区	福田 夏
一	葛飾区	須原 素明
一	台東区	中田 和子
一	名栗村	石井 勲
〃		浅見 茂治
一	〃	石井 松次
二	愛知県	尼僧 栄順
一	練馬区	新井 弥
二	中野区	松村 智雄
一	東松山市	馬場 優子
一	練馬区	津吉由喜子
一	〃	津吉 勝弘
一	神戸市	奥村 直子
二	新宿区	鴇 晃秀
一	練馬区	平沼 とみ
二	鎌倉市	鬼 俊民
一	大分市	吉川 周子
四	練馬区	鈴木直太郎
一	仙台市	鬼 嘉子
一	練馬区	山口貴美子
一	港区	石上 靖子
四	北区	上原 淑
三	名栗村	岡部 博吉
二	豊島区	林 玲子
二	目黒区	中沢たえ子
三	中央区	由井 正武
二	文京区	西沢 誓仙
二	新宿区	上田一之他
二	板橋区	大塚綾子他
二	練馬区	伊藤国男他
三	清水市	今村秀峰他
三	青梅市	梅田シズ他
三	川崎市	清水章臣他
三	豊島区	林 玲子他
二	富山県	小島 賢道
四	静岡県	鈴木よ志子他
二	富山県	本田芳全他
二	高崎市	榑松モト他
二〇〇	川島町	関 八朗
二	練馬区	松井 綾子
一	畑毛温泉	望月 為則
一	川口市	永瀬 昭二
一	練馬区	平沼 静代
一	〃	平沼 敏子
一〇〇	立川市	神保 綾子 幸宏

本表計

一、〇六二巻

五七・二末現在総計

一〇、六二三巻

第三文庫建立（中間報告）

発願者　開祖　平沼桐江先生

第三文庫図

建築現場での平沼先生

平沼先生ご夫妻の、仏像彫刻に注がれた心魂は、そのまま仏像を拝する人の心に、脈々として伝ってまいります。

その彫刻に使用された「ノミ」「ツチ」をはじめ霊場建設に係わる身近な品々を保存閲覧に供するため、第三文庫として建立が発願されました。

銅葺木造二階建六二、五平方米（一九坪）

一階　四六平方米（一四坪）

二階　一六、五平方米（五坪）

完成予定　五七年四月

※今秋落慶ご報告を予定しております。

鳥居観音だより

十月

○参道（自動車道）一部舗装

玄奘三蔵塔から三観音に向う参道の一部、七〇米幅三米を舗装す。

○主なる参拝

四　日　豊島区、小川勘兵衛さま奉納。
　　豊島区、山上き久江さま奉納。
　　狭山市、岡田信子さま祈願。

十～十一日　連休、お天気に恵まれ、車も一日二五〇台を超える賑い。

十二日　新宿区、青木国枝さま奉納。
　　川口市、栗山登茂さま奉納。
　　狭山市、六本木初代さま交通祈願。

十七日　名栗村中学生写生会。馬場校長先生奉納

十八日　入間市、吉田健夫妻祈願。
　　新宿区、大金俊夫さま祈願。

二十日　与野市下落合小学生二〇〇名参拝。

二五日　東京、深水暢治ご一家先祖供養。

三一日　清瀬市、堀沢幸正さま他奉納。

○今月中の一万体観音奉安（本誌十九頁参照）

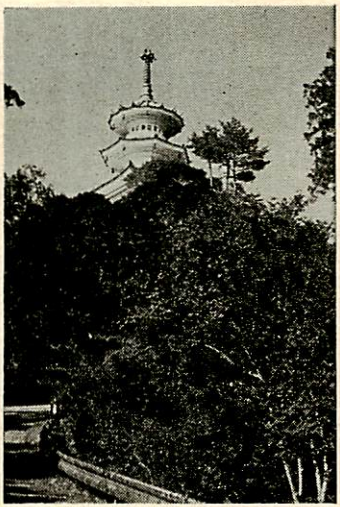
府中市、田中基子さま他七名、二十体。

十一月

○秋季例法要

時恰も紅葉の真只中。鳥居観音のお山は、満山錦で飾ざられます。

十七日は恒例の秋の法要。朝方の好天気もあって遠来の参拝多数。浦和講中数十名、与野トヨペット講中、三鷹講中、日本火災講中、武蔵野講中はじめ駒込小川さま、上石神井武関さま、世田谷新妻さま入間の吉田さまご一行など。本堂の法要を終えて、山頂の大観音に参拝、庫裡での懇親会、境内の探勝を満喫されての一日であった。



三蔵塔を仰ぐ紅葉

十三日　日高町、関八朗さま（八十八才）より、写経二二〇巻届く、翁は既に写経壱千巻を超える奉納あり、篤信の人なり。

十五日　トヨペットコロナ会三〇〇名団参。千代田区、荻原寛子さま奉納。

二十日　観光バス四台団参。

二一日　江戸川区、矢野秀雄きま一行五〇名団参

二二～二三日　連休で車一日二〇〇台の参拝。

二四日　入間市婦人団体参拝。

○今月中の一万体観音奉安（本誌十九頁参照）

東大和市、松野翠さま他十三名、二十四体。

広い駐車場をうめた連休の参拝車

○主なる参拝

三　日　立川市、小林徳久ご家族奉納。目黒区、田辺さわさま奉納。朝霞市、広瀬秀雄さま他奉納。

四　日　北区老人会、一四〇名さま団参。

九　日　新宿区、青木国江さまご一行奉納。荒川区、美濃部美津子さま祈願。東村山市、村山誠治さま祈願。東大和市、松野翠さま奉納。

十　日　所沢市、小山権之丞さま奉納。

十二月。

この月にはいると、元旦の祈禱札作り。年の暮れまで、庫裡は大童の毎日が続く。

紅葉で賑わった山内も、流石に静まって、腕を伸ばした裸木もわびしく、「観音の滝」も一入身にしみます。

○今月中の一万体観音奉安（本誌十九頁参照）

武蔵野市、金子弘さま他九名、二十四体。

観音の滝

元旦祈禱お札申込の状況

数	住所	講元・扱者名	数	住所	講元・扱者名
五二	越生町	小森　茂	五	三鷹市	松井　吉雄
四	清水市	松田　江畔	二三	名栗村	平沼　幸一
一二	狭山市	井上　竹吉	一一	飯能市	横川　一郎
九	坂戸市	若松　志津	四	東大和市	村山宗太郎
六六	名栗村	七、八区 篤信者	一七	名栗村	吉田仙太郎
八	〃	浅見　光雄	一八	〃	岡部仲治郎
二一	与野市	井上　政雄	一五	川越市	原田　愛助
三五	日市町	鈴木　嘉三	一五	町田市	細見　富雄
一一	三鷹市	宍戸　睦子	六	板橋区	植田　セツ
六	東大和市	清水　健生	五三	飯能市	水上　清
四	川崎市	吉田　一男	一五	越生町	畑　くに
七	鳩山村	関口　喜一	八	青梅市	清水　勲
六一	飯能市	飯能地区 篤信者	二一	名栗村	矢島　武一
四八五	与野市	埼玉トヨペット㈱	一五	〃	町田　要一
一〇	名栗村	野本　栄治	五	新宿区	大金　俊夫
六	世田谷区	山崎　完	二三	川越市	斉藤　恒作

数	住所	講元・扱者名
一五	名栗村	町田　延行
八	〃	片山　武夫
四	入間市	中村　敏三
一四	板橋区	榎本みや子
一三	浦和市	武州印刷㈱
六	世田谷区	高田与志子
四	練馬区	保田　静江
九	名栗村	浅見達次郎
九	飯能市	渋谷　文造
五〇	朝霞市	広瀬　秀雄
八八	大泉学園	滝田　トキ
一〇四	所沢市	小山権之亟
八六	与野市	トヨペットコロナ会
三三	飯能市	武居　藤吉
一九	名栗村	佐野　正助
五	〃	松下　愛吉
二一	世田谷区	新妻　宏充
一四	名栗村	岡部　安一

数	住所	講元・扱者名
五	浦和市	岩井　良太
五	鎌倉市	畑　カノ子
八	台東区	清野　福松
七	狭山市	六本木初代
二四	青梅市	小峰　久治
二一	名栗村	枝久保鶴四郎
一九	入間市	吉田　健
七	入間市	粕谷　達二
一二	東松山市	中里　勇吉
一〇	東京	日本電装㈱
七	渋谷区	平井平八郎
九	所沢市	服部　雄次
四	川口市	栗山　登茂
四	飯能市	平沼　玉枝
三九		その他

合計　一、七〇二札

○除夜の鐘

一〇八の煩悩を払うというこの鐘。撞く人も又、聞く人も来る年への祈りもこめられる。

遠来の参拝者も年毎にふえ、底冷えするなかで、熱い甘酒の接待がよろこばれる。

○「願かけ観音」に縁起板が寄進さる

本堂右下脇の「願かけ観音」（石仏）は、朝霞市広瀬秀雄氏の納祀で、既に大勢の帰信をいただいていますが、この観音さまが、昨年夏百才の長寿で亡くなられた氏の母堂の念持仏であったことから、そのお加護の礼と、亡母への供養とをかね縁起板が建てられた。

願かけ観音と縁起

一　月

本年は壬戌（ミヅノエイヌ）の年、壬は妊（ハラム）の意を示し、おこなった事柄が身心に妊（ミコモ）り、残り、来年の癸（ミズノト）の年には、それを縛り固めるといわれます。悪いことを残さないよう、心ろ掛けねばなりません。

戌（イヌ）は茂るの意で、草が茂って大地をかくし、枝葉の茂りで（末節にとらわれて）幹（本質）を見失うことのないよう教えられています。

○元旦祈禱会　清々しいまでに澄んだ元旦、尾尻老師の導師のもと、村内寺院の随喜（ズイキ）を戴いて、祈禱会修行。終って祝杯とお雑煮で賀詞交換がなされた。

川越、原田愛助さま講中ご一行。渋谷、今井平八郎さま講中ご一行。川越、斎藤恒作さま講中ご一行。板橋、植村さまご一行。飯能、平沼さまご家族。越生、畑さまご家族。狭山、六本木さまご家族。立川、小林さまご家族。所沢、小山さま。飯能、細田さま。坂戸、平井さま等、大勢であった。

○主なる参拝その他

二～三日　入間市、吉田健ご夫妻、町田市、細見富夫夫人、神奈川大和市、柏木伊助さま、川口市、栗山登茂さま、狭山市、中村敏三さま、ご一同奉納。

四～五日　鴻巣市、吉田孝さま、朝霞市、広瀬秀雄さま、大泉学園、滝田トキさま奉納

八～九日　宮岡昭三さま、武蔵野市、内田桂一郎さま祈願。

十～十二日　川崎市多摩講中団参奉納。東京、日本電装（株）交通安全祈願。

十五～十七日　飯能市、浅見昭子さまご祈禱。渋谷区、有島順江さま他、松沢孝一さま奉納。

二一日　第三文庫上棟式執行。

平沼先生ご夫妻、式典に列席、関係者一同を激励指導されてのお帰りであった。

三一日　奥多摩、村木善太郎さまご家族祈願。

○今月中の一万体観音奉安（本誌十九頁参照）

所沢市、越阪部勝さま他十八名、四十三体。

○平沼先生ご夫妻の動静

先生は本年満九十一才を迎えられ、寒さにご留意され乍らも、ご夫妻共にお健やかな、ご日常でいられます。年末年始のご参拝をはじめ、第三文庫の、上棟式にも参列があって、微にいってのご指導がなされ、今秋に予定される一万体観音の満願法要が、楽しみだと仰云られます。

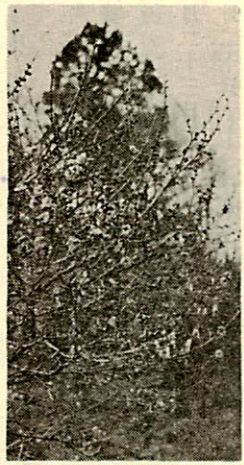
二月

飛んでくる風花（カザハナ）に身を縮かめ、よぎる風に頬をそむけることもあるが、日は確実に延びて、一輪一輪ほどの暖さはあらそえない。

流石に暦を見ると、立春、観梅、鶯の初啼きなど春のけはいは既にいっぱいである。

○主なる参拝ほか

三　日　節分豆まき。各堂塔で諷経。
　　入間市、浅見きみえさま奉納。
五　日　武蔵野市、内田桂一郎さま祈願。
十四日　狭山市、六本木初代さま先祖供養。
十四～二十日　浦和市、水野勲さま、黒沢文雄さま、川島駿さま、金子恭子さま、新宿区、宮村剛さま、渡辺章介さま、松井磐さま、飯能市、柳島勝馬さま祈願八座。
二一～二七日　青梅市、浜野誠一さま、飯能市、岩崎健二さま、浦和市、吉田義男さま祈願三座。日高町、小谷憲成さま夫妻、先祖供養。
二八日　立川市、神保幸宏さまご一行祈願。
　　千代田区、料亭「みなづき」牛供養。
　　施主有島順江さま他、本堂に於て懇ろな法要が行われた。



咲き初む観音の紅梅

○今月中の一万体観音奉安（本誌十九頁参照）

新宿区、相内文一さま他三名、四体。

○これからの行事

○五月八日　花まつり（月おくれ）

お釈迦さまのお誕生日、花み堂をつくり、甘茶を接待してお祝いします。

○七月十日　四万六千日

この日にお詣りすると、四万六千日お詣りしたと同じご利益が戴けるといわれます。

○七月十六日　卒塔婆施餓鬼供養

午後二時、山頂の大観音堂内に於て行われます。塔婆は法要の後、堂外に建てられ、お先祖さまや、観音さまの、おもりをしていただきます。

○八月十六日　流灯施餓鬼供養（月おくれ）

午後四時本堂で法要、夕刻より灯篭ながし、打上げ花火、盆踊りなど。年々盛んになり、遠来の団体が増えてきました。

手づからお流しになられては、いかがでしょう。

七月半から当日まで受付けいたします。

「○○家先祖代々」など適宜、お申込み（電話も可）下さい。電話〇四二九七―九―〇四一七番

供養料　一灯に付　千五百円也

近隣お誘い合せ、ご参拝お待ちしております。

○九月二十三日　秋彼岸法要

○十月二十日～十一月末　紅葉まつり

十一月上旬の紅葉は格別で、全山参拝者で賑わいます。

○十一月十七日　秋季例法要

一万体観音満願報恩法要

第三文庫落慶法要

一万体観音の満願と、第三文庫の落慶も重なり、報恩大法要を予定しております。

紅葉も最盛りで、一般の参拝者も多く、殊更の、賑わいであろうかと、心ろのはづむことであります

とりゐ　第五十二号　発行日　昭和五十七年四月十七日
発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　平沼　宏之
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音　電話　〇四二九七―九―〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図

夏と秋の行事

○塔　婆　供　養　7月16日　午後2時

○灯　篭　な　が　し　8月16日午後4時～9時

千数百の流れる灯篭船、打ち上げ花火、夢幻の一つ時です

○紅　葉　ま　つ　り　10月20日～11月末

紅葉に頬が染まり、大観音からの眺望は絶景です

○秋　季　例　法　要　11月17日10時半より

一万体観音満願報恩法要

第三文庫落慶法要

○常時供養、祈禱申し受けております

ご先祖、水子供養

家内安全、商売繁昌、交通安全、安産、厄除けなど